

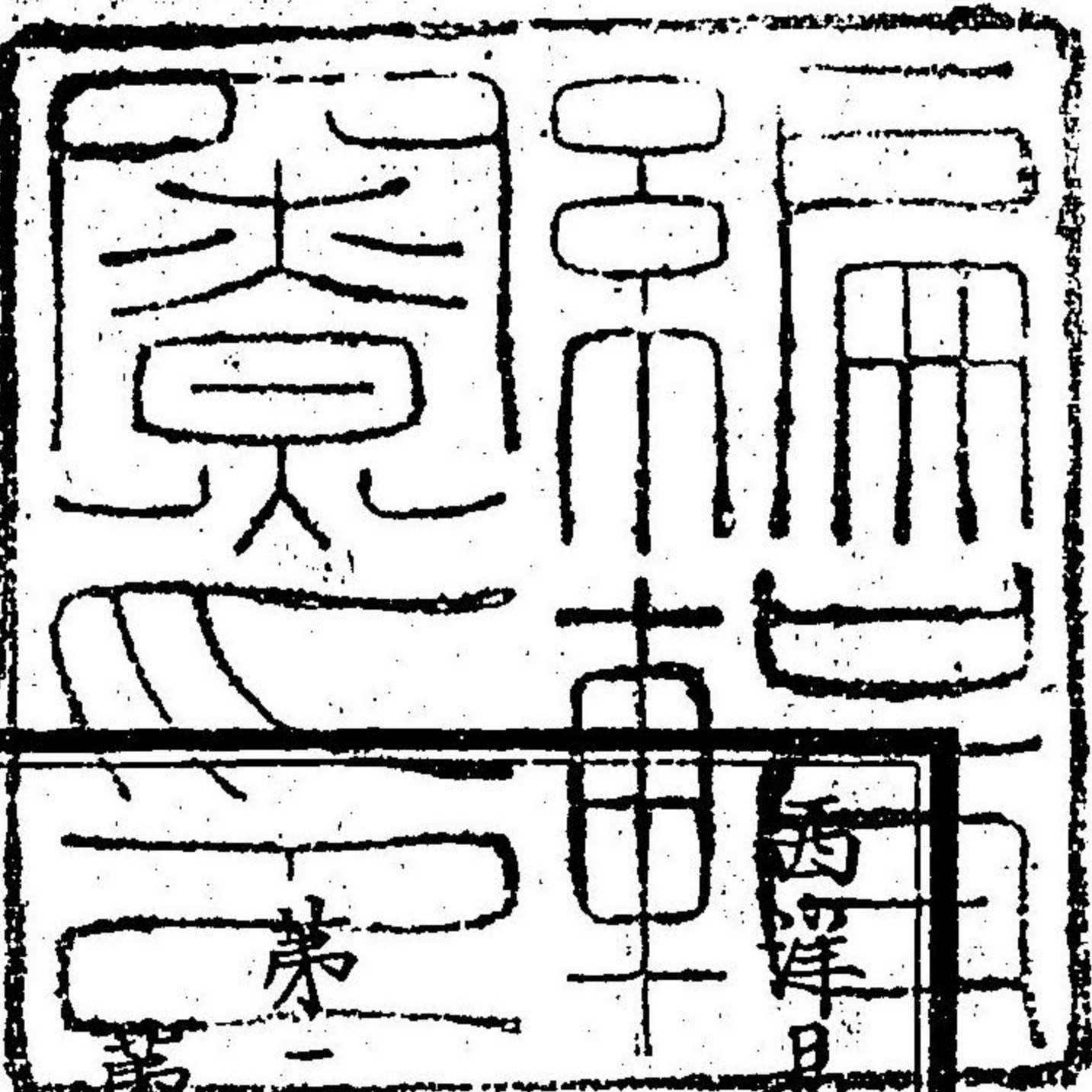
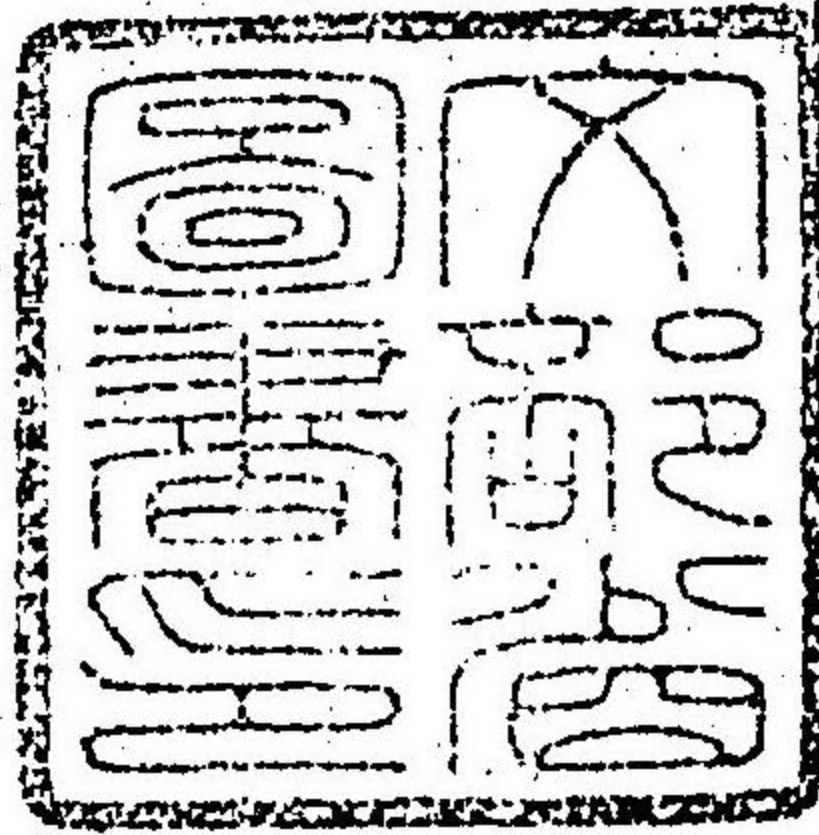
西洋易知錄

特31

674

室	號	架	函
六	一	二	〇

六
九
本



西澤易知録

第一

第一篇



如地尼安帝時代の事

帝羅馬の國法を改正せしむ

河津孫四郎

譯述

鐙譯局

イタリヤ
 伊太利王オドロセルを紀元四百九十三年に至りて
 國王の位より降りしむ此歳澳斯土羅俄的の王テオドロ
 クの爲に攻滅せられテオドロクをカシオドリユスと
 りんる大學士を輔佐とし良政を行ひしむ伊太利國
 とも沼まり荒れしむる田野を忽ち葡萄米麦を生し美屋

所_レ起_ル閉_ル金_ノ鐵_ノ山_ヲ又_レ開_キテオ_ドロ_クク_ヲ務_テ羅_マ人_ト澳_ス土_ノ羅_シ俄_的人_トと_レ區別_シク_レね_ド羅_マ人_トを_レ舊_ク如_クト_ガと_レ着_キて_レ文_ノ官_トを_レ務_メ俄_的人_トを_レ尚_ホ皮_ノ衣_ヲ輕_ク皆_ト穿_キて_レ武_ノ官_トを_レ任_ジク_ル此_ノ如_キ事_ト凡_テ三_十三_年より_レ紀_元五_百二_十六_年至_リ此_ノ歲_ニテ_オド_ロク_ク死_スル_ルし_テ此_ノ國_ニま_ニ内_ノ亂_起ル_ルテ_オド_ロク_ク伊_太利_ニ至_リ時_{ヨリ}僅_カ前_ノ事_トふ_くべ_シ佛_郎哥_人ノ_首長_ト哥_路易_ト後_世路_易ト_レ變_シテ_レ名_トふ_くべ_シと_レの_豪傑_トソ_ノム_ノ河_ト南_ニ渡_リて_レ一_擧メ_テ羅_馬人_トを_レ再_レ給_ル農_人維_西俄_的人_トを_レ打_靡け_テ忽_チ里_尼河_ノ三_叉より_レ比_里牛_斯山_ニ至_リ地_トを_レ平_定し_テ紀_元四_百九

十六年哥_路易_レ一_ムス_ニ於_テ西_ノ教_ヲ洗_禮と_レ行_ヒ此_ノ教_門ニ_後徒_リ後_幾程_もあ_く其_ノ都_ト巴_勒ニ_定メ_テ五_百十_一年_此地_ニ於_テ薨_ジク_ル是_ノ人_ト則_チ佛_郎西_國王_ノ先_祖ニ_似テ_レ之_トを_レ葬_リク_ル寺_今尚_存在_リ哥_路易_ノ妹_トを_レ伊_太利_王テ_オド_ロク_ク嫁_シク_ル是_ノ前_ニ如_ク地_尼安_トの_人剛_士但_知腦_布爾_城ニ_生ま_リ其_ノ叔_父ハ_ダシ_アト_レの_處ニ_猛キ_農民_トシ_テ其_ノ名_トを_レテ_オス_チン_トの_人デ_オス_チン_ト少_キ時_レオ_帝ノ_衛兵_トあり_テ遂_ニ東_帝西_帝ノ_國既_ニ滅_ビテ_レ故_ニ東_帝混_雜セ_テ記_スル_ル為_メ位_ニ登_リシ_テ如_ク地_尼安_トを_レ教_育シ_テ之_トを_レ養_子ト_シテ_レ紀_元五_百二_十七_年

如地尼安の叔父帝を継ぎて東帝とあることを得たり
 たり如地尼安帝の將ベリサリュースとつらひる則ち此
 頃の名將あり此名將を波斯の戦争に大功を立てる
 帝又之を命じて亞弗利加の合太爾人を征伐せしむ
 紀元五百三十三年九月ベリサリュース此地に到着し同
 月の中に加爾太額城まで攻寄り合太爾王ゼリメル
 之を防ましが遂に打破られしうバニミゲアン山
 に逃げ入りしが飢え堪へざりて降参しつねバベリサ
 リースと之を將と剛士但知腦布爾城に歸陣しつり時
 二分取しつり物の内は猶太の神殿よりつりし露の兵器
 あり抑此器の昔し羅馬帝チヌスの耶路撒冷城を乗取

しと名満る見ゆ第一之と掠めて羅馬城を遷しつり物
 一後合太爾王ゼンセリツの羅馬城を亂妨せしとき
 卷の一篇五又之と掠めて加爾太額城を遷しつり今
 又ベリサリュース之と掠めて耶路撒冷の西教寺院を置
 きありしに豈由来奇異あり器よりつらひや
 後ベリサリュース又伊太利の俄的人を征伐さぐま欽命
 を受けりしうを頃と紀元五百三十六年都城を離れ
 て悉西利に趣き此地を平定して後伊太利に渡り拿破
 里を打從へ羅馬城を乗取りつり俄的人の王ヒチジス
 散したる兵をラベンナ城に集め之を率てベリサリュ
 ースを羅馬城に圍むり此時ベリサリュースの兵の負け

色はありしがベリサユース自ら兵士は先づら血相を
 侵して奮戦し多しを俄的の寄手の打破らせて退
 まり是日より數日の間は寄手の兵軍さの用意を整
 へ再び此城を攻懸るべリサユースを士卒は命じて
 固く城を守らしめ寄手の攻寄るとを相待ち自ら矢を
 放ちて一矢は夷王を斃し二矢は他の夷將を殺しけ
 り味方の者共之は勢を得て城中より散るは敢たりし
 うを寄手の大は辟易して退きたり是より一箇年餘俄
 的人此城を圍ふ屢之と攻つらども更は其功を成ま
 ことあり或時を城中より打壞さるる石像を扱けりけ
 らは是大敗を取りしこともありたり此時羅馬の教公シ

ルベリユース俄的人は書簡を贈り城門を開くと約し
 たり事發覺し及び城中と追出されぬ此項羅馬教公
 官の権威ふりていふ人君と去程は俄的人の遂
 壓をりては攻めりけり自ら陣營を焼き拂てラベンナ城
 は退きたり時を紀元五百三十九年あり其前年伊太利
 の第二都米蘭城を佛郎哥人の為は毀たせしとぞ
 是は於て伊太利の國羅馬の管轄は屬しけり僅は數
 年の間とつらども昔の如く東西合して羅馬帝の地と
 ありたりは實はベリサユースの功あり然し朝廷よて
 の之を妬む者却て多く中にもナルセルとつらり人の
 之を猜むこと一方ありは其落度を見付んとつら念ひ

初め波斯王スシルハンアンチオク城を攻め破り
 耶路撒路城を攻めんと謀りしバ帝ベリサリュースは
 命じて之を迎へ打としめーグベリサリュースを二箇年
 紀元五百四十一年の戦争を以て遂之をエウフラーツ
 河の外に逐ひ退げしむ此時如地尼安帝大病の報告
 陣中に至りしはベリサリュース思ふに歎して嗚呼已
 哉后妃テオドラを位を譲らざるに相當したる婦人
 非むといひくろく諛者直ち之を以て帝を諛言し
 ねば帝大に怒りて之を召し返し直ち之を殺さんと
 したりけれども其妻アントニナ后妃を寵せしめし
 バベリサリュースを幸は死一等と看され重き過料を命

ヤシキリ

去程は俄的人ハトチラスとソへ智勇兼備の人と首
 長とふし伊太利の地を復さんとて大に軍を起し
 帝之を聞ま又ベリサリュースは命じて紀元五百四十
 四年に於て僅し人負を以て此國に進發しトチラスを防
 がしめくろくが衆寡相敵をすること能くは遂に五百
 四十六年に於て羅馬城を俄的人に取らねたり後一二
 箇月にしてベリサリュース又此城を取り復し固く之を
 守りかねども伊太利の南地追々皆之を背きて俄的王
 に歸服しはバベリサリュースを獨り此城を守ること能
 かりと以て五百四十八年に於て朝廷に歎願し歸國し

ありたり

ベリサリュースを兵破て都城を歸りしは佞人其間を乗
 一之を諉しつるが幸を死罪を免うれば平民は下をたされ
 たり然るに紀元五百五十九年を於てブルガリア人
 とワルハラ山^{ウラル}の夷多腦河^{ドナウ}を南に渡りて東帝の國を
 寇し都城を去と僅に二十里の地を入るなり時を帝
 又ベリサリュースを擧て將とふし之を防がしめたり又
 ベリサリュース少き時の武勇を奮ひ直ち夷を追拂ひ
 て其功を奏しつるが朝廷に於ては此時もまた恩賞ふ
 く之を免して舊の如く民とふしより後程なくベリ
 サリュースを反逆を謀りしと讒言せし者にけりしうど朝

廷より其罪を以て家財を召し上げ家は蟄居せしめ
 り後ベリサリュース之を免されたりけれども烈しく鞭
 うちしうど免されり後僅に八箇月を以て死したり
 今此名將の往來して腰を屈め袖乞ふる所の古画を傳
 ふ是昔の詩人画工の筆寫し多るものとワルハラも今
 の史家の大抵之を信ぜり
 去程はナルセスへはぬいをベリサリュースに代り伊太利
 の俄的人と逐ひ拂うべき命を蒙りしうど倫巴爾ヘル
 リ匈奴三部の人と兵を合して俄的人とタジ子に於
 て合戦し其王トチラスを殺し容易く羅馬城を奪取り
 たり時を紀元五百五十二年あり其翌年即ち五百五十

三年に於てナルセス又トチラスの嗣王テイアスとベ
 シビエース山の趾に於て戦ひ之を殺し之を俄的人の
 伊太利より逐ふこと能ふに遂に盡く此國を去りより
 初め俄的人の以太利より來りしより是に至りて凡て六
 十年ありきやナルセスハ佛郎哥人及び亞列麻尼人と
 も又此國より逐ひ拂ひしに功よりてラベンナ
 の城主に封ぜしむ數年の間以太利國を支配し威徳を
 示しきり
 如地尼安帝國法を刪改せしむ抑是まで諸帝の詔書愚
 くあるも曲きるも皆國法と定めしを以て國法甚だ繁
 く一件毎に十餘の異法ありき及びしにバ人皆國法を

知りこと能きざりしに是に至りて帝其不都合ある
 と知り則ちトリボリアン等諸學士と共に古法の多
 きを刪す其意を加へり足らざるを補ひ四部の法律を
 作りたり一云く改正舊法是は舊法を刪改し多きもの
 多く紀元五百二十九年に成業せり二云く國法の基
 源是は國中の學士より示さるる為に國法の本理を説き
 りそのよりして紀元五百三十三年に成業せり三云く
 民法全書冊數凡て五十冊よりして全備を是書ハ右同年
 より三箇年よりして成業せり四云く新定法是は如地
 尼安帝自ら作りし新法あり
 如地尼安帝在位の時戯馬の最負より都下の人民二

此項北狄倫巴爾人多腦河の方へ攻め来るるも又ア
 バルス入るとして巧とある烏拉山の夷土身其人を攻
 めしきしうが山を棄て多腦河の方へ来り遂に倫巴爾
 人と兵を合すくゼビデー入るとして此河の邊に住
 める夷を攻め其首長を殺しつ倫巴爾王アルボイン
 其腦蓋骨を盃に作らしめ且つ其女ロサモンドを夫人
 とふしより去程アルボインの盡く侵掠の地をア
 バルス入ると與へ自ら兵を率て牙白山を越へ伊太利の
 北地を侵掠し則ち伊太利王と歸しつ時より紀元五百
 六十八年より今倫巴爾治とつゝる地の倫巴爾人の侵
 掠せし處あるの斯くの若づけしあり後程よくアルボ

インを賊の爲に殺されつ初め酒宴のときアルボイ
 ン其夫人を強ひて父の頭をて作する盃にて酒を飲ま
 しめつねに夫人之を恨みて遂に此事を謀りつるふ
 りとてアルボインを継ぎたる王クレーフを位に在る
 こと僅に十八箇月よりして死しつるが此間其國を
 ベ子ハンチムヤを横ひつるクレーフ死してより十年
 の間倫巴爾人再び王を立てて三十六の公侯其國を分
 て支配しつるしが政甚く善くつるしつるが紀元五百
 八十六年倫巴爾人またオリタリスとつゝる入を立て
 王とふしつる是より死に二百年の間ハ伊太利の國
 二分して一ハ倫巴爾の王を歸し一ハラベントの城主

に屬しきり

紀元第六紀間東帝即位の表

帝の名	紀元
アナスタシウス	
ジヨスチン第一	五百十八年
如地尼安第一	五百二十七年
ジヨスチン第二	五百六十五年
チベリユース第二	五百七十八年
マウライス	五百八十二年

第二篇 教公の權勢盛んなる事

○紀元五百九十五年教公グレゴリ
 剛士但知腦布爾の高僧の書簡を
 贈る

羅馬教公の權勢ハ甚ど曖昧にして今よく之を知ること能ふは耶蘇の高弟ヨガリレの漁人彼得といふは紀元六十六年頃又倒磔の刑に處せられたる名僧にして羅馬教公を最負する輩ハ皆此彼得を以て羅馬教公の先祖ありとせしむるは是とて慥らある證據なりことハいふまでもなく角すれ昔し羅馬の教公ハ郭外に廬を結び多る貧しき僧より初めの世の人更

尊まざりしと疑ひおし後西教の制禁盛ありし時及
 びし其頃の教公ハ實ニ皆潔白にして真神を信ぜり
 こと厚く有りたる名僧ありしハ誅戮せらるる者多
 かりたり第一紀より第三紀までの間ニ教公とありし
 僧三十人ありしが其うち十九人ハ殺されしと云ふ
 耶蘇の生ぜしよりいせと一百年に至らざるニ耶蘇教
 門の寺院諸國ニ滿ちり初め此等の寺院ニ於て奉
 ぜり所の耶蘇教ハ希臘教ギリヤ耶蘇教の一派として今昔西
 部ニ於て其語言經文及び禮拜の儀式ニ至るまで皆希
 臘ニ用ひしが後紀元二百年の頃ニ至りテルチユリアン
 と云へる名僧テラチン亞弗利加アフリカニ起り臘丁語の經典と著せし

より臘丁の耶蘇教と云へるもの興りしあれば此教門
 の始原ハ亞弗利加アフリカよりと云へるも羅馬城ローマを其頃既
 ニ開きし地方の中央ありしが故ニ西洋諸國耶蘇教の
 徒皆ソコシテ羅馬の教公と以て耶蘇教門の本流の如
 く思ふに至り

然る所紀元三百四十三年ニ於て諸國の僧徒サジカニ
 會し教門ニ付き決せざることありハ之と羅馬の教公
 ニ許へんことと議定したり教公の權勢又更ニ盛
 んとあり紀元三百六十六年僧ガマシスの教公とあれ
 る頃ニ於てハ諸國の僧皆爭て此官ニ撰ニハクシテまらるることと
 歎まらる及びたり尤も此頃剛士ニハクシテ但知腦布爾城の高僧

ハ羅馬の教公と勢と競ひたり

羅馬教公のうら其權勢と盛んありしむるは取力を盡

しあるものなりインノセント第一レオ第一グレコリー

第一又グレゴリウスの三教公ありたり

インノセント紀元四百零二年より四百十七年オノリュース帝の

時法位は即きし教公あり此人常は羅馬教公の位を以

て萬國高僧の上は立るしめんと欲したることへ其嘗

て西方諸國の僧徒は贈りたる書簡の文を見て明くは

知るべしとて俄的王アラリックの羅馬城は攻寄せたり

しやオノリュース帝ハラベニナは匿きて更は羅馬城を

願ひたりしがインノセントを城中よりしりば城中

の入皆教公のこゝを頼ると思ひたり然し此時ハ羅馬城

より金と以て夷は與へ辛くして和睦と為ることを得

りたり後幾程もふく夷狄又攻め来りしが此度ハイン

ノセントも又城中よりは是より前は教公ハ帝と諫

て諸夷の征伐と為さしめんと欲し自らハラベニナは趣

ましが故ありきて教公ハ諫言用ひりて都城は歸り

し要都城ハ既は夷狄の為る狼藉せりて城中大半灰燼

とあり舊き教門の寺社神像等咸く滅びしりは是より

耶蘇教門日々盛んあり時至りしを以て教公の權勢

彌益しるなり
インノセントの法位は在りしときは當りて英人ペラ

ジースとソヘの僧起りたり此僧を在来の耶蘇教の説
 と違ひ人皆舊罪を負へりといふとは誤りて人各
 己の見識と行ふことと得まは神と拜せども自ら
 神の命を背かざることと得べしといふ説を唱へて羅
 馬亞弗利加及びパレスチンと旅行しり然るは亞弗
 利加なるヒポクリシツ僧はオーギュスチンといへる名
 僧なりペラヂュースの説と誹謗して在来耶蘇教の正し
 きことと説法しりるが諸國の僧オーギュスチンの説と
 以て正統耶蘇教の本旨と定めりりるも教公イン
 セントとオーギュスチンの説に従ひ諸國の僧は命して
 ペラヂュースと教門の反賊と稱はしりり後幾程もか

くインノセントを卒しりねば之を継ぎし教公がジ
 スペラヂュースと追放しりり後ペラヂュースを如何か
 りしや史家之と傳へむ

レオ第一ハ紀元四百十年より四
百六十年に至る紀元四百十年に於て

法位に登りし教公あり教公ハ羅馬城中に於て生きた
 りて常に羅馬教公の權を大なることと務め且つ
 教門を背きし僧徒を嚴酷に罰しりり上卷にもつへり
 如く教公ハ匈奴王アチラと説て羅馬を去らしめられ
 たり三年の後含太爾王ゼンセルクの羅馬城を攻め寄
 せしとれども亦之と説きよるが但し此時ハ其言聴きざ
 りしといへども之の爲め夷王の羅馬城を狼藉せんと

欲する氣力大に減ししとぞ

羅馬の教公追々權威を得しこと此の如し其唱ふ所の教は於てハ別々許多の僧有りて教公の爲め之を廣めたり其中の最尊むべき聖僧ハゼローム卷の一附記

アンブロース上オーギスチンの三僧ありゼロームハ

嘗て教公グマシスの書記官と務め後ベトレームの

門とありモナスチニスムとて寺に入リて世俗と交え

らざることと始めし僧ありモナスチニスムとて

とを教公の教を弘むる大に利有りしと云ハアンブ

ロースハ米蘭のアルチビツツプ官僧あり一が嘗てテアド

シース第一帝のテッサロニア人とを鑿とせし罪を聲し

帝として久しき間懺悔を爲さしめ僧の威權ハ帝王の

上より多へまことと唱へたりオーギスチンハ既上

は説く人皆此僧を稱して臘丁教の祖ありと云ハ我

敢て之を當らばとせむ

羅馬國を滅しし諸夷の中ゴット俄的人先づ耶蘇教は徒り

其他の夷も追々此教門は徒りし程は羅馬の帝國ハ滅

びしと云へども羅馬教公の權威ハ益盛んとありしを

以て羅馬城ハ天下に冠多し昔の威權を失はざり

の事ありば教門ハ天下人民の心神を服せしむること

あれハ舊羅馬の兵力ありしよりも却て遙々盛んといふべきあり

グレゴリーゼグレレートを紀元五百九十年より紀元五
 百九十年は法位に即きし教公ありしが羅馬教公の威を
 盛んにせし三教公の一にして又臘丁教の祖と稱せり
 其一人ありり其いさむ法位に即りシントアンデ
 レウの桑門なりしとき羅馬の奴僕市にて英産の童子
 と見しが頻り其美を感して英國に西教を弘めん志
 と生し後法位に即くに至りて直ちにオージェヌチンと
 法使となし英國に遣しり此教公の時より西方の
 諸國是班牙亞弗利加英國に至りて耶蘇教の弘まら
 ざる處ありり然る猶太教及び耶蘇教の諸派を
 奉る者といへども嚴酷に之を罰する事ありりし

の賢りりりる教公といふべし此時は當り剛士但知腦
 布爾の高僧ハ約尼といへり人として萬國高僧といふ
 尊號を稱せんことを欲し諸國の僧に之を望まししが
 レコリー則ち約尼は書簡を贈り萬國高僧の稱に背し
 諸國の僧カルセドンは於て會議の上羅馬教公の先祖
 聖波得は厭じたる號あれば其後の教公は皆此號を
 稱するを他國高僧に對して害なりとて棄らざりし稱
 て之を稱するの神意は背する旨と説きまらり時より紀
 元五百九十五年ありきて又倫巴爾人屢羅馬を攻め來
 りグレゴリーと惱ましるりて遂にグレゴリーの
 智徳に屈して咸く耶蘇教門に使はり紀元六百四年に

レゴリ一卒を此人ハ僧ノ職ハ言フモ更アリ政事文章
 又至リテも善クセザル者アリテ教公多シトワレドモ其
 上ニ出ル者アリ
 是より一百五十年ノ後佛王北比諾伊太利ノ北地ニ於
 テエキサルケート及びペンタポリスセ教公ステーハ
 ンニ贈呈シテより教公又領國ノ權ヲ得ヨリ

第三篇

馬疴美德ノ事并ニ回ク教ノ事

要紀元六百二十二年馬疴美德メジ
 ナニ奔リ

第六紀ノ項亞刺伯國ニ如何アル人種住ヒクヤと尋

るニ中國ノ平沙^{ホム}ノハベドリーイン人トワレテ夷黒キ幕セ
 張リテ所々ニ散居シ海岸ノ地ニハ商人農民ノ住ヘ
 小屋多ク又波斯猶太希臘等ノ入其中ニ雜居シテ其
 項土民ハ日ト星トセ禮拜シ大アリ寺ハメツカ城アル
 カーバトワレテ寺ニシテ寺中ニ黒石ト安置シテ其
 皆此石ハ神ノ使メ化シタルモノトシテ初メハ純白色
 アリテガ罪入ノ觸ルニシテ以テ今ハ黒クアリシアリト
 語リ合ヒテ此國ノ風ハ詩ト好ト又亂妨戦争ト好ト
 云

紀元五百七十一年亞刺伯國メツカ城ニ馬疴美德とい
 ヘル人生まケリ其父ヲアブダラといヘル「カーバ」寺ト

預る貴人ありたり其母ハアミナと云ひて宗門と云ふ者
 の女ありしが馬疔美德六歳の時兩親とも皆死しあり
 一ウバ叔父のアブタレブと云ふ商人馬疔美德を引
 取り其家ニ養ひたりされど少き時より叔父の為ニ駱
 駝と引きて諸國ニ商賣をふし數シーリアエーメンの
 地ニ趣ましし程ニ種々の昔譚を聞き耶蘇教の説ふこと
 も聞き只管之を感じたり年二十五歳の時カヂアとい
 へり富商寡婦の番頭とありしニカヂアハ時ニ年四十
 歳にして年齡大ニ馬疔美德と異ありしと云ふどもウバ
 あり縁ノや馬疔美德の才美を戀慕して遂ニ之を夫とふ
 し借老同穴を契りたりきて光陰矢の如く紀元六百十

一年とあり今茲馬疔美德ハ四十歳とありよりその
 數年前より馬疔美德ハ教山中ニ趣ま竊ニ經史を學び
 心を摧きて百般の工夫を凝しけるが此歳始めて妻カ
 チア從弟アリ家僕ゼード親友アブベケルの四入ニ語
 りてガブリエルと云ふ神使降りて我ニ百般の正理
 を告け新ニ宗旨を作して諸人を善ニ導くべしと命せ
 られしと物語りたり其説く所の天ニ唯一箇の神あり
 馬疔美德ハ神ニ代りて神意を諸人に諭さば命を蒙
 るをたか入ありと云ふことと大目とありり宗旨の名ハ
 「イスラム教」即ち回教と云ふなり「イスラム」とハ從服と云ふ
 ことよりして入ハ神ニ從服をんまを云ふあり

馬疔美德法を説くこと三年よりして僅か四十人の弟子
 を得たりしが尚も之を弘めんと欲し則ち親戚を家々
 招きて神を命じしよと語り誰まう我を助きて法
 と弘めんやとつひたりアブタレブの子アリ時又年十
 四歳ありしが席を立て馬疔美德を向ひ我をこそ君の
 為に法を弘めまうせんといひしが其餘の人くと皆
 狂氣せしあんとて嘲り笑ひありたりメツカ城
 中の入と之を聞き皆馬疔美德を惡としつバ馬疔美德
 を城を去り志づらく叔父の家を客居し此を於ても又
 法を説き後メツカ城を歸りしが其頃叔父死去しつれ
 ば今ハ馬疔美德を守護する者なく城中の貴人等遂に

相盟て馬疔美德を害せんと謀りしつバ馬疔美德の弟
 子アリよ巴島の衣服を着せ其寢室をわらしめ其身
 の夜半に城中を遁出しメツカケルと共に一洞中に匿
 ること凡て三日よりして稍く此洞を出て遂に紀元六百二
 十二年七月十六日又於てメツカ城に入りたり此地に
 ハ弟子多々ねのあり今ハ内回を教を奉むる者皆其日
 を名々して「ヘジラ」と稱し其日より年月を算ふるにメ
 デナ城に於て馬疔美德の始りて寺院を建て此に於て
 回を教を説法しつ後馬疔美德の死骸を葬りしハ是
 寺院あり

馬疔美德メジナ城に入りし後兵力を以て其法を弘め

んことを欲し則ち云く神は為る戦へい則ち天堂へ上
 かんし神は敵し戦へい則ち地獄へ墜つべしと説法
 して弟子の闘心を勵ましり
 紀元六百二十四年馬荷美德弟子三百十四人を率ひて
 ベーデル谷に伏し多カ入千人許りシリアより歸る
 路を蔽ひ北へを逐て多カ城に至りたり此時掠めし
 物の内は名作の劍一振り後馬荷美德常は之を帯び
 しとぞ其翌年マジナ城の北數里よりオホット山に於
 て馬荷美德又多カ入と戦ひ我兵敗る其面部は疵を
 被りたり然し勇氣逞しき馬荷美德是等の疵をば事と
 もせだ又多カの大將アブツヒアンの兵と戦ひ大は之

と破り威名を近隣に轟がしりれは其後馬荷美德千四
 百の勇弟子を率ひて多カを攻め寄せたりときい多カ
 の入敢て之に當らんとする者なく一同は和睦を乞ひ
 たり是より於て馬荷美德多カ入と十箇年の和睦を盟ひ
 たり
 此頃亞刺伯の北地に於ては猶太人大は兵と起して馬
 荷美德を討んと謀りしりば馬荷美德兵を轉じて猶太
 人の要城カリバルを攻めたり時よりアリアの緋色の衣總
 鐵の鎧を着して諸軍は先づら奮戦せしが楯を失ひる
 りしりば門の扉を引搥りて之を楯とふして戦ひたり
 きて其城遂は落りしりば馬荷美德城に入り食物と

命マホトツトクマホトツクマホトツ小猶太の少女羊の肩と煮て獻じたり馬疴美
 徳之と喰ひマホトツ一日味の常と異あれるを疑ひ餘りハ之を
 弃てマホトツマホトツ然マホトツもども此肉ハ原と毒藥を混マホトツぎマホトツるものふ
 道ハ馬疴美德と全身忽ち痛と生し多く之を食ひし
 弟子ハ死マホトツマホトツ程マホトツふく馬疴美德ハ病愈マホトツりしとソム
 ども大ニ健全と損マホトツしマホトツり
 此勝利より馬疴美德の威名亞刺伯アラビヤニ轟トウゴウき國中大半之
 ニ服しマホトツる程マホトツニ則ち東帝ヘラクルマホトツニス及び波斯王コス
 ルニスマホトツの許マホトツニ使節と遣し回マホトツく教マホトツニ従マホトツふマホトツまマホトツりマホトツハ
 贈マホトツりマホトツるマホトツガコスルニスマホトツを怒マホトツて其書簡マホトツを引裂マホトツまマホトツヘラク
 ルニスマホトツも更マホトツニ之マホトツと悦マホトツバマホトツりマホトツり然マホトツもとあマホトツるマホトツベシマホトツリ

アマホトツニ於マホトツく馬疴美德マホトツの使節害マホトツせマホトツしマホトツるマホトツバ馬疴美德則
 ちゼマホトツードマホトツと立マホトツて將マホトツとふし兵マホトツと率マホトツひマホトツくマホトツメマホトツヂマホトツナマホトツと出立し
 東帝の國マホトツニ發向マホトツせしマホトツるマホトツきマホトツてマホトツシマホトツタマホトツ死マホトツ海マホトツの東マホトツとマホトツリマホトツ人
 處マホトツりて兩軍會戦し東帝の兵大ニ敗マホトツせマホトツり然マホトツもども我
 將マホトツゼマホトツードマホトツ及び副將マホトツニマホトツ入マホトツ打死マホトツしマホトツり
 紀元六百二十九年馬疴美德マホトツカ城マホトツを取らんと欲し一
 萬人マホトツと率マホトツひマホトツ銜マホトツ枚マホトツ速行マホトツしマホトツ敵マホトツの意外マホトツニ出マホトツで城外マホトツニ於マホトツて
 アマホトツグマホトツソマホトツヒマホトツアンマホトツを虜マホトツニし白刃マホトツと以マホトツて之マホトツを劫マホトツしマホトツて回マホトツく
 教マホトツニ徒マホトツらしめ則ち之マホトツを放マホトツして城中マホトツニ歸マホトツし城中マホトツの入り
 降参マホトツを勸マホトツめしマホトツえマホトツりマホトツされマホトツバ一入マホトツとマホトツし我兵マホトツニ當マホトツり者
 あマホトツりマホトツるマホトツバ馬疴美德マホトツハ堂マホトツ々マホトツたるマホトツ三軍マホトツと率マホトツひマホトツるマホトツ故

那あるメッカ城に入ると、城中擧げて回く教は歸順し
皆賀して云く神の功德廣大なりと馬疔美徳ハ其輔翼
ふふと此と名回く教は從ふべしと誅せしむる者三
百六十人ありと云

馬疔美徳又シリアを攻む時其將カラトの兵ハイ
ウフラーツ河よりアイラ城紅海の東の地と掠め
たり此城ハ亞弗利加アフリカに入るの要地ありば之と取りし
より回く教の亞弗利加は廣くまき道開くよりさき
も馬疔美徳ハダマスキユス城は向て發しるるガタブル
クとワハる處より兵を引返しメデア城は歸りたり
馬疔美徳時年六十一歳より熱と病と紀元六百三

十二年六月七日卒去したり病の根元ハ先年羊肉中
の毒より中り又且つ愛子イブレームの死しるるを以て
精神弱りしより起りしありとワハ馬疔美徳ハ偽と以
て人と誑き多し惡憎ありとワハども其大才多智ハ実
に感歎せし

馬疔美徳の説きし法の其死後アブベケルの纂輯し
「コーラン」經に載せたり「コーラン」經ハ神使の告げしと
詐すく馬疔美徳の追々説き出したるを高弟子謹て之
を椰子の葉及び羊の骨に記し置きあると轉めしあり
別々又「ソナ」經とワハる馬疔美徳の言を集めたる書
ありとワハども「コーラン」經ハ如きと云ふ

回く教の至要ある法の左り如し

一は神の唯一箇のりり

二は各位の神使のりり其中はイギリスとワヘるをアダムを禮拜せざりし罪よりて天堂と放逐せられし神使あり又ゼニ及びペリスとワヘる死まべき罪を侵しある神使もりり

三は神通力あり入六人あり曰アダム曰ノア曰アブラハム曰モーセス曰耶蘇曰馬疴美德是とあり

四は地獄天堂のりり天堂の美驚くべく女色の樂盡を^{あつらひ}樂地あり

五は人の自己の意の如くあること能くば萬事天命

の如くありて入得て之を變ふる事能くば信心より回く教を奉る者ハ四箇の業を行ふ

一は手足を洗て毎日五度メッカ城に向て禮拜する事

二は我家財の十分一を以て窮民に施する事

三は「ラマダン」の月の回く教曆三十日の間日出より日没まで斷食する事

但し家猪の肉及び葡萄酒ハ平素とワヘども食ふことと許さば

四は一生一度の必むるカメ參詣する事

但し代參してもよろし

馬疴美德の卒去せしとき其位を繼がんと欲せし者四

又ハリクワリ一ハ馬疴美德の最愛せし妻の父アブベケ
 ルニハ第二の妻の父オマル三ハ二女の婚オトマン四
 ハ從弟アリクワハチマとワヘリ馬疴美德の女と娶リ
 一又アリアブベケル遂ハ馬疴美德ハ繼ぎ亞刺伯王と
 あり自ら嗣王と稱シクワリ其時ハ於テ勇將カレットイウ
 フラーツ河の邊リヨ回ク教の属國を建て又進テダマ
 スキユス城を圍ヒ紀元六百三十四年ハ於テ遂ニ之を下
 シ其同日ヨアブベケル薨シクワリ
 オマル之ハ繼ぎテ亞刺伯王とありしが王も亦シロー
 アの戦争と巴リテ六百三十七年ハ耶路撒冷と取
 リシクバ則チ此城ハ入りシヨオマルを為シ又侈奢と好

まゞりクワレハ是時粗キ髮毛布の衣服と着シテ烏色の
 駱駝ハ乗リテその頸ハ二箇の囊と結ヒ付け其一ハ米
 と入キ一ハ水と入キシト今耶路撒冷ハオマルの
 寺院ワリ是レ則チオマルの建てシものあり去程ハオ
 マルの兵又アレホアンチオクハ二城と下シクワレバシ
 ーリアの地盡ク平定シヨクワリオマル則チ又其將ア
 ハルヒセシと疾及テ攻打シシヨ一ハ六百四十年ハ於テ
 此國第一の都亞カ山大城我兵ハ降りクワリ亞カ山大城
 一の珍書の庫ワリしが回ク教の兵之と燒キシトワ
 ン人多クワリシトワハ近來の學士ハ皆其書庫ハ馬
 疴美德の時より前ニ滅ビシヨクワリオマルハ

又別の一將と遣へて波斯を攻めしえり。此戦争も亦身方は利多くてカテシアとワム處を兩軍三日の間戦ひし。我兵波斯の兵を打破り三萬人を殺し旗章と奪ひたり。我兵勢を乘て波斯の都マガインをとり又ナハベンドを於て合戦し我兵之を勝ちし。波斯王エズゼルドハ國を奔りて出奔し。波斯の國遂に歸服し。よりウガオマル則ちイウフラーツ河の邊よりバツソラクハの二城を建てて此地の平定を謀り。バツソラクハ波斯灣に近きと以て交易繁昌の地とあり。クハを回王の都とあり。是に於てオマルハシリア埃及波斯の三國を平定し其功大ありと云ふ。

ども憐むへし嘗てソジナ城ある寺院あり。波斯の火神と拝する者の為傷々。是後日あり。薨じたり。時六百四十四年あり。

オットマン王とあり。其時於てシリア侯モアウヤ兵船を造りて東海に浮びシロプロユスローテス島の巨像を打壞さたり。紀元六百五十五年オットマンメジナあり。其家於て賊の為に殺されたり。時年八十歳あり。

アリ則ち亞刺伯王とあり。不平の者甚ぶ。多く時シリア侯モアウヤ謀反し。紀元六百六十一年アリ賊

の為、弒せられモアウヤ位と繼ぐりモアウヤを亞刺伯國オミヤト朝の高祖あり

モアウヤの時其子エジト父の命と奉じて剛士但知腦

布爾城を發向し紀元六百六十八年より六百七十五年

まで七箇年の間之と攻めしうども攻むる毎々希臘火

物と混しつた油の他、の爲は打破られしうが亞刺伯の兵

ハ皆辟易して歸國しうり此より四十一年の後亞刺伯

入再び此都城を攻めしうたも亦利、うづぐりま

然りとつへども地中海の南岸を發向したる亞刺伯入

の之は又して利多く其將アクバ勢を衆し直ちよバル

バリー全國を横行し紀元六百七十四年を於て今のた

ニスの近邊はカイロアンとつへる一城を築きうり此

地後、亞弗利加北地の大都會とあるまうもバルバリ

の土民等ハ其兵を追退うんと欲して種々の企てを

ふしうりうれども一として破られざることをよく亞刺

伯の勢益盛んとありシレイントリポールの二城を下

し六百九十八年を於て加爾太額城をも亦打壞きうり

うれうり十三年より亞刺伯入遂に此地を平定し又

是班牙を攻めんと其用意を為しうり

第四篇

佛國「メロウインダアン」朝諸王并に執政

の事

〔要〕カリスマール紀元七百三十二年查理馬突耳亞刺伯入とツールスと戦ふ

メロヴィンゲン朝の王ハラモンド紀元四百十八年位即けより凡て三十四王ありと云此朝第三の王ハメロクグとウヒーより「メロヴィンゲン」朝と名づけしあり第五の王ハ則ち哥路易コロイスとて既上にもウヒーフリス如く佛國と起しコロイスと入あり
紀元五百十一年に於て哥路易薨せしとき其國分裂して數個の君之を支配し佛郎西國遂に四大部に分きけり一ハニーストリアとて羅爾河の北とウヒ二ハオーストラシアとて里尼河の東とウヒ三ハアコイテイン

とて羅爾河より比列尼斯山に至り四をボルゴンヂーとてサオン羅尼二河の流る所之地とウヒフリス後佛國王ダゴバルト第一紀元六百三十八年即位の時に至り佛國一紛しフリスが其薨る後又分裂し其亂以前より過あり
國王の代々皆懦弱ありしに執政遂に權を擅しけき執政を國兵を領し軍用金と預ると以て其權恰も人主の如かりし執政のうちに最有名あるハヘリスタルの北比諾及ひ子查理馬突耳孫北比諾布列布の三人あり
オーストラシア公北比諾フリス即ヘリスタルを佛王テオド

リック第三の時執政とありテストリとワム所よりニュー
 ストリア人と戦ひ勝利を得たりしうがニューストリア
 とも亦其支配地とふし後ニューストリア及びホルゴン
 チーの地は其子を封じて代々執政とあることを謀り
 たり北比諾の紀元六百八十七年執政とありコロリン
 及びアイタスラシヤバルを執政府とふし佛國を支配
 するること二十八年より卒去したり
 北比諾の子查理ら七百十五年父を繼てオーストラシ
 ア公とあり七百十九年執政とあり國政を擅よりたり
 然るに國王の田舎に住ひて麥屋鳩舎の中を暮し或ハ
 又愚うある顔色をして怪しむある牛車に乗るたり唯

髪の毛の平入りより長きを以て僅か佛王の徴しと失ハ
 ざりしのみ

查理の執政よりや日耳曼の諸夷を歸伏せしめんと
 欲し盡く佛郎哥人佛郎哥人を民兵とふしより然し
 いまご其志を果さざりし外に一箇の大事事件起り

其大事事件との何を令之と下し説ん

亞刺伯入紀元七百十一年よりジブラタルの海峡を渡
 航して是班牙に到りしが遂に唯西俄的入り都城セ
 レスと攻め落し勢を余て是班牙の大半を打平け又比
 列尼斯山を越へて佛郎西の南地を攻め入りたりアコ
 イテロン公イウド之を迎へて戦ひしが其兵も亞刺伯

人又打破られしバ亞刺伯の兵ハ彌破竹の勢とふし
 羅爾河の邊り又至りし時又紀元七百三十二年あり
 查理之と関き佛郎哥入と率ひてツールスとポイクチ
 ールスとの間あり一野又於て亞刺伯又と戦ひ大之
 と破り首を斬ること三十萬級ありしバ亞刺伯人の
 皆降易して是班牙又退きし是時又當て若し查理の
 武功ありせば西歐羅巴の諸國皆回く教又歸順せざ
 ると得ざるべし其功宣大ありといえざるをらんや
 借も查理ハ再び日耳曼諸夷の征伐を企て容易くバハ
 リアン撤克遜フリシアン三種の夷と打従へるも但し
 查理ハ軍用金を取立る毎又寺院とソムども之と免を

ことありしバ國中の僧徒等其功德を稱美せざり
 たり○羅馬教公グレゴリー第三查理又聖波得の墓の
 鍵を贈り且つコンシユル及びパトリシースの尊號を予
 へ教公を助りて倫巴爾人を伐つことと頼としが查理
 を國內の事務繁まを以て之を承諾せざりたり
 紀元七百三十七年佛王レリリ薨ししバ查理其嗣
 を立つることふく自ら佛郎西公と稱して七百四十
 一年まで四箇年の間佛國を支配し此歳又卒去しし其
 二子北比諾カルロマンの二人繼て執政とあり又佛王
 と立てしが程ふくカルロマンハ僧とありて伊太利の
 一寺又入りしバ北比諾獨り國政を行ひたり

北比諾布列布ハ父查理と違ヒ僧家を懐なつくことと欲
ししねバ撒克遜サクソンの僧ウニフット後マエンスのア専ら
此事を助けあり

諸も「ロウインガアン」朝の諸王ハ以前より唯名のみ
して權威ふまき君とありしところ羅馬教公より數度倫
巴爾人を打ちられよと北比諾の許へ頼まり來りし北
比諾を教公を身方とあしき篡位を謀んと欲ししねバ
教公の頼とて承諾し且つ教公は言をしめて云く其威
權は有つ者と名指しめしと有つ者といふがまか玉多くべ
き教公願はハ之を決せよと教公は此時の教公をカ直ち
又威權はり者王位は昇て可くあるんと答へしは北比

諾則ち佛王タルデルク第三を廢し一寺を併し自ら
佛王と號ししり是をカルロウインガアン朝の祖とます
北比諾を二度即位の禮を行ひ一度ハボニヘス即ち
アリト之を冠らしめ一度ハ教公ステーヘン親ら羅馬
よりシントデンスは到りて之を冠らしめり
諸も北比諾ハ羅馬教公の頼と應じて伊太利イタリヤを發向
しエキサルクゲイトペンタポリスを攻め取りしは之を
教公は獻じて恩を謝しり上はも云へるが知るられ
しは北比諾の功只是のは非を又撒克遜人はと打従へアコ
イテはンを攻め取り亞刺伯人アラビヤと追拂ひバハリアン人

と降しく屬國とふりたり紀元七百六十八年北比諾堯
 子カルロマン查理の二入國を分て領しカルロマン
 を南部と王とし查理ハ北部を領せり此查理とソハを
 即ち高名ある查理曼の事あり

第五篇

昔し歐羅巴に住ひし諸夷の由来を述
 ぶ

昔歐羅巴に住ひし民多くハ追て亞細亞より徙りし
 ものより大に民の移住せしこと四度ありたり第一
 一は徙りし夷ハ希臘伊太利の國に住ひ第二は徙り
 しハセルツシンプルの二民より是班牙佛郎西不

列島の國は住ひ第三は徙りしハ日耳曼より歐
 羅巴中央の地に住ひ第四は徙りしハサルマチアン
 人より然る後匈奴人烏拉山より來り韃靼人東海より
 來りてサルマチアン人の住ひし地に移り住め
 り

東の方より新しき住民の徙りたり毎に其前より徙り
 し民ハ又その地を去り西及び南の方より徙り或ハ相
 互に混合し或ハ舊民と雜居し之れハ遂に中古近世
 の歐羅巴に民種各種あるに至りしあり
 日耳曼諸夷の大なる者ハ俄的佛郎哥人含太爾人

倫巴爾人撒克遜人スカンデナヒヤ人あり
 俄的人ハ原トスカンデナヒヤ國昔シ瑞典椰手氏ニ合テウク名リ
 此ニ住ヒシ青眼黄髮の夷あり今此國ヨゴドランド
 ゴデスコンジア俄的人ヲ城トゴットランド等の地名云ふ語あり
 以テ之ト證をべシ然シ土着ト好まざるハ開
 けざる民の常ありハ俄的人も亦本國の沼澤森林中
 ニ長居することト満足トシバ紀元二百年頃ニ始メ
 テ南地ニ出でるしガ直チニ歐羅巴中央の地ニ至
 ンテ三大部ニ分け各諸河ニ住居をぐま地ト撰とけ
 テ三大部トハ維西俄的的澳斯土羅俄的的捷俄的ビ
 テーの三部あり俄的人を日耳曼諸夷のうちニ最

開々しるるあらば早く西教但シ亞流の教ニシテ正統の西教ニシテ
 徒りし夷ありその瑞典ニ去りしより二百餘年ニシ
 テ酋長アラリック羅馬城ニ攻メ入りり卷之一維西
 俄的人ハその後ニ是班牙ニ行きて一國ト起し七百十
 一年ニ至りテ亞刺伯人の為ニ滅さるルゼビデー人を
 ウィスチラ河の源の周りニ住ひ後多腦河の邊りニ徙
 ンシガ倫巴爾人の為ニ滅さるル澳斯土羅俄的人ハ羅
 馬國滅ス後伊太利ニ住ひシガ此地ニ於テその滅
 亡シるルことハ既ニ上ニウヘリ俄的人ハ野獸の皮
 ト着粗末の沓ト穿ち太き股引ト腰の周りニ革ヲ以テ
 縛リ附けるル夷俗ありしトウヘども我ニ思ふニ其

民を功德盛んある開化に至るべき人種あること必
 ずり是も何故ぞあれば其風信義ありて慈寡ありし
 のとありて人の妻ある者皆謙讓貞節あるが故に家
 毎に家内和合しより實に感歎すべき美俗ありてや
 今歐羅巴諸國の風と視るにこの美俗當今に傳るり
 其上西教の教盛んよして萬事盡く開化すること全
 く造化の恩徳あるべし

第六紀の頃佛郎西は三部の人住ひたり北及び中央
 には佛郎哥人あり西南には維西俄的人あり東南に
 は不爾給農人ありり但しセルツ人即ち告人及び羅
 馬より移りし人も此國に住居しりれども皆三部の

人は屬しり佛郎哥人の二大部に分ち一は色利安
 佛郎哥人として今の白耳義の地に住ひ二はリプアリ
 アン佛郎哥人として下里尼河の邊りに住ひたり今に
 尚女と王とあることふま國法譬へは佛郎と色利安
 法といふ色利安人の名残きるあり上よりいへる哥路
 易と則ち色利安人の長あり此人のものと身分貴き者
 は非されども其才智を以て此位に至り諸所を於て
 武功を立てしとき僧徒等其徳を稱し且つ東帝より
 金冠紫衣を賜ひりよよりて遂に夷王とあり巴勒は
 都しり其國をてる毎年の春兵士會合して事と議
 しりり會名を「シャンドマルス」の會といひたり府城

と昔しの羅馬國法を用ひて其郡の知事官グラーベと
 之を支配しきり哥路易コロイスの後嗣を襲を長して田舎に
 住ひ更は國政を知らず唯毎年后と共に牛車ウニオンを乘り
 て「シマンド」の會に出駕しりしあり佛郎
 西國を佛郎哥人の地あるを以て斯く名つけしとい
 へども今の佛人ハ大半セルツ人の後胤あり
 含太爾亞蘭不爾給農フエーブス四部の入ハ俄的人
 の攻撃に屈して里尼河ライニの源と多腦河タニとの間あり高
 き地と去りたり其時不爾給農人の佛郎西の東地は
 住ひしが幾もあく哥路易ゴロイスに従服しきり此民ハ此地
 又於て或ハ農民或ハ工人とありしが久しき間昔の

夷風を守りたり就中開けざるハ妻を賣買する習ハ
 しりたり含太爾スエーブス二部の人は是班牙スパンニヤ
 入りて此國の西北隅ハ一箇の國を起しスエーブス
 人のそとより此地はしりしが維西俄的人の為滅
 されり但し含太爾人の猛き夷ありしバ紀元四
 百二十八年に於て亞弗利加アフリカより渡り其北地を打従へ
 又小船を以て地中海に浮び諸方を掠りて大に富と
 しガ後懦弱とありしバベリサリスの為滅さ
 せり委上
 羅馬人諸夷を賤しめて俄的人ゴットをハ奇しき風俗の田
 舎翁と渾號し含太爾人ハ風雅の趣よく名高き古

禹碑銘と壞つことと樂り畜生と號したり
 倫巴爾人の進ジッラ路筋の既上より其もと往
 ひし地を人徳蘭ジッラありスカウ河の邊りより其地よ
 り巴郎徳不爾厄の平地に徙りたり然る處大水出て
 家を流るるに至りしことゆへしうバ倫巴爾人皆エル
 ベ河の邊りより水と避け後又東南多腦河の邊り徙
 り又其地を去て伊太利國に攻め入りたり今倫巴爾
 治とつゝの處に即ち其民の攻め取りし所あり
 撒克遜人のもとホルステーンに住ひし夷ありしが
 後之ツセル河の流るる所の地に徙りたりこの夷と
 近き胤の民種はアングルス及びジッテスとつゝる

二部の夷ありしが是の連馬に住ひたり三部皆テウ
 トン種即ち日耳の夷より眼の青く髪は赤く若し
 くハ黄よりて頬を薄紅あり三部の人不列顛を攻む
 ることハ曆史中の頗る至要なる事件あり委し
 録外篇この時不列顛の舊民セルツ人を山中に退き西洋易知
 長劍短刀斧鉞を以て自ら防禦の謀をふし不列顛の
 セルツ人と同し胤の民を阿爾蘭の住民よりて此民
 を博奕漢獵牧蓄と業とし此頃の昔より詩樂と巧
 とあり紀元四百三十二年蘇各蘭の僧パトリック此國
 に至りて耶蘇教を説法ししが五百六十三年に於
 て阿爾蘭の僧コロンバ蘇各蘭に至りて同し教を説

法しるるを奇らしき譚あり

テウトン種ノ諸夷とセルツ人と衣服政法職業宗旨
 又於てハ大ニ相異ありテウトン人ノ幅廣き粗末
 ある長き衣を着して木刺を以て其襟ととめ少き者
 ハ常ニ鍔ノ領を用ひ戰場ニ於て首級を取らる上ふ
 らむと之を捨ること能はざりしテウトン種ノ中最
 猛き夷アバタハ戰場ニ於て首一級を得ると
 きハ髪を切り一度盡く之を剃りたりセルツ人即ち
 例之と違ひて靚麗なる衣服を好む且つ腕若しく
 ハ頸ニ金鎖を懸多り今蘇各蘭スワットランドノ山ニ住む人の用る
 タータン蓋し衣服の名未詳物あるべし及び佛蘭西人フランスの

衣服の風をセルツ人の制度の今も残るありテツ

トン人の共和政治を好むセルツ人の貴顯政治を用ひ

テウトン人を戦争と業とふしセルツ人の耕作牧畜

を好む且又セルツ人をドローイヂスルの宗旨と奉じて

久しき間之を變せざりしがテウトン人を之に及し

てもとより唯一箇の上神ウパの信イじありし

ハ直ニ耶蘇教イエスを授けり

和蘭オランダの里尼河ラインの流るるとき次第ニ其泥土を押し上

がしより成り多る地より古を大なる沼より其

海岸より彼處此地ニ森林ウツの沼中の堤上ニ魚を食

ふ夷住ひ多りしが或時水大ニ出て此夷を流しり

後ち日耳曼の一猛夷カチ人の一隊此地に住ひ大半
 之と固地とふし之をバトリと名けり今ホルランドの和蘭人
 ハ其後胤ありスカンデナヒアニアスウェーデンノルマンの事
 を三の卷に至りて論をへし
 昔し歐羅巴北地の寒き海岸のヒンヌス人住ひたり
 此民をモンゴル人種の一部として髪黒く性質溫柔
 ありし民あり今のラプラント人ハ即ち其後胤あり
 後サルマチアニアカサフマチアニアノハ緑眼人種と
 けし名あり然し此民を自らスクラホニア人スウェーデンと号
 せりとスクラホニア人スウェーデンとの狭勇人種とフィンランドノニア人フィンランドと号
 せりとヒンヌス人を攻め打ち其地を押し領しりサルマチ
 アニア人を車と列強と城とふし戦ふときハ兵卒等粗

布の胸當と着し一二匹の瘦馬を引て進み戦ひ魚骨
 と毒と澆シキきて之を箭鏃槍尖ヤクとふしり其宗旨ハド
 ロイヂスム教ドクトリンと似る一種の宗旨ありき又此民
 の風俗は快シキとく習シクハし多うりき中も其
 敵を勝ちたるシキとま皆悦シキて敵の首と盃とふし血を飲
 しハ言語は絶へし悪俗ありシキや
 波蘭ポーランドの國ハスクラホニア人スウェーデンの一族リアエックス人
 之は住居し昔しより盛んある國あり其戦は趣くや
 農民ハ楯と槍とを持し歩シキりて戦ひ貴人の冕シキた
 り甲冑シキを着し馬上シキりて戦へり且又黒海と波羅的バルチック
 海と交易シキするハウイスタラ河を通行するを以て波

蘭^{ランド}をてを之^{ウラル}が為^{ウラル}よ益富と重^{ウラル}なり
烏拉山の方より西入し多^{ウラル}許多の夷兵の代^{ウラル}々皆カ
ルパチアン山の陝路を越^{ウラル}て多^{ウラル}腦河の邊より下りし
グ^{ウラル}ワグ^{ウラル}も一度の匈^{ウラル}牙利の地を押し寄せたり俄^{ウラル}的
人の第一は此地よりし^{ウラル}が匈^{ウラル}奴人の為^{ウラル}に奪^{ウラル}りた後
又アバルス人^{ウラル}ズルガリアンス人^{ウラル}マ^{ウラル}グヤルス人^{ウラル}代^{ウラル}々
此地を押し領し^{ウラル}たりマ^{ウラル}グヤルス人の紀元八百五十五
年^{ウラル}に於^{ウラル}て此地を取りし民^{ウラル}より其^{ウラル}開けざること殆
と匈^{ウラル}奴人と異^{ウラル}ならんみ^{ウラル}る常^{ウラル}に馬と食^{ウラル}しより強^{ウラル}りて
彎^{ウラル}き^{ウラル}艶^{ウラル}ある色の旗^{ウラル}を附^{ウラル}たり槍^{ウラル}と面^{ウラル}を扱^{ウラル}け付^{ウラル}たり此
民^{ウラル}匈^{ウラル}牙利^{ウラル}より来^{ウラル}りしより暫^{ウラル}時の間^{ウラル}に開^{ウラル}化^{ウラル}し進^{ウラル}む其^{ウラル}國

藝業耕作貿易一時は盛大とあり紀元千年頃耶蘇教
門^{ウラル}に徙^{ウラル}り追^{ウラル}ふ美俗の民とありたり紀元千四百五十
六年^{ウラル}に匈^{ウラル}牙利^{ウラル}人^{ウラル}ベル^{ウラル}グ^{ウラル}ラ^{ウラル}ード^{ウラル}の城外^{ウラル}に於^{ウラル}て土^{ウラル}耳^{ウラル}其
の強兵と勇戦し十日の間^{ウラル}に三度^{ウラル}之^{ウラル}を破^{ウラル}りしこと近
年^{ウラル}暴政^{ウラル}に敵^{ウラル}抗^{ウラル}し^{ウラル}て勇^{ウラル}戦^{ウラル}し^{ウラル}ることを諸^{ウラル}人の深^{ウラル}く感
歎^{ウラル}せる處^{ウラル}なり^{ウラル} そい後くの巻よ至
そい委しく説らん

西洋易知録卷之二終

西洋易知録卷之二附記

第二世聞入の姓氏

シドニースアホリナリス

紀元四百二十八年告ゴ惡ラ

爾ルは生る○アルベルニのニビニゾゾあり○テオドリッ

クは寵愛せり○其作る詩賦書簡あり○四百

八十四年死を

ゾシミユス

希臘ギリシヤの史家あり○著をローマ羅馬國史あり

プリスレアン

恐らくハセーサレーの人ありん○

如地尼安帝の宮中ハ仕へり○名高き文法家ハ

して著を所臘ソラ丁文法あり

ブーチュース

紀元四百五十五年羅馬城に生る

○オ

ドラテンアセル及びテオドロクコシネルに仕へて江士官あり○

臘丁理學家あり○パヒアの獄中よりしりしと見理

學書と著せり○五百二十六年に於て刑せり

プロコピウス

第五紀の末に於てセーサレーに生

る○ギョスチニアン帝の宮中ダヨスチニアンに仕へり○嘗て其

時代の記録と著し又知地尼安帝宮中の紀事と述

べし書と著せり

カシオドルス

紀元四百七十年頃テオドに生る○テオド

リックの書記官あり○其著を所儀的史記ボリり又用

字學グラビの書及び生徒と教ふる法と論せし書と著る

紀元百歳よりして死を

ツールスのグレゴリー

紀元五百四十四年オリーブ

ルンラテンに生る○ツールスの「ビソップ」あり○嘗て臘丁

語と用て佛郎西國史と著せり今の史家「ロウイン

ガアン」朝諸王の事と述るに盡く其書の説は據る

オーギユスチン

羅馬のセントアンデレウ寺院の主

僧あり○紀元五百九十六年教公グレゴリー第一

の命と奉じて英國に趣き耶蘇教と説法しり○

カシテルバリーの「アルチビソプ」とあり六百七年

頃此地に於て死せり

ベード

紀元六百七十三年頃ソンドレルランドに生

○英吉利の桑門あり○人之と稱して「ヘ子レ」
 ブル導人」と號せり是蓋し其德行を賞せしふ
 づべし七百三十四年頃英國教門の記録を著せり
 ○其翌年死を

ウイニフレッド 紀元六百八十年頃デボンサイル
 生る○後改名してボニヘースとワへり○日耳曼
 於て三十年の間法を説きたり○後マエンスの
 アルチビツゴとあり○七百五十五年フリシアン
 ス人の為、殺さる

第二世の紀事の表

	紀元
哥路易バインス戦、武功を顯す	四百八十五年
澳斯土羅俄的人、伊太利を平く	四百八十八年
哥路易巴勒、都を	五百十年
アルチュル不列顛、王多り <small>但し真偽未詳</small>	五百十五年
如地尼安帝位、即く	五百二十七年
ベリサリユース、亞弗利加を勝つ	五百三十三年
ベリサリユース、伊太利を勝つ	五百三十六年
ベリサリユース、又伊太利を攻む	五百三十九年

リアエックス人波蘭の國と建つ	五百五十年
絲と製造する法歐羅巴に傳はる	五百五十一年
伊太利澳斯土羅俄的の國滅ぶ	五百五十三年
倫巴爾人伊太利と侵掠を	五百六十八年
馬荷美德生る	五百七十一年
オーギヌスチン英國に趣きて説法に	五百九十六年
馬荷美德メジナに奔る	六百二十二年
馬荷美德死を	六百三十二年
オマル耶蘇撒冷城を取る	六百三十七年
亞刺伯人又人々との剛士但知腦布爾と攻む之と圍むこと七年遂に去る	六百六十八年

西教の高僧剛士但知腦布爾の會を	六百八十年
亞刺伯人は是班牙と攻む	七百十一年
亞刺伯人又剛士但知腦布爾と攻む	七百十六年
查理馬突耳亞刺伯人と大にツール	七百三十二年
スに戦て之を破る	七百三十二年
亞刺伯アバシエード族亞刺伯の王	七百五十年
位を奪ふ	七百五十年
北比諾位を即く	七百五十二年
北比諾エキサルケート及びパンタ	七百五十四年
ポリス地の教公を興ふ	七百五十四年

田く教の國コルドハ興る
查理曼佛國と一統を

七百五十五年
七百七十七年

西洋易知錄卷之二附記畢

